

「南九州・南島と大宰府」

講師・回答：永山 修一先生(ラ・サール学園ほか非常勤講師)

この度は大宰府アカデミー・令和編 第2期を受講いただき誠にありがとうございます。

皆様からいただきましたご質問につきまして回答いたします。

なお、ご質問につきましては、抜粋して掲載しておりますことをご了承ください。

Q／ 三野城・稻積城について、講座ではこれらを南九州に所在した隼人に対する山城とされていました。南九州にあった根拠として地名を挙げておられましたが、それ以外にこれを補強するような説があれば教えてください。また、熊本の鞠智城も対唐・新羅ではなく、隼人に対する備えという側面があるのでしょうか。

A／ 回答

三野城・稻積城については、残念ながら、補強する説はありません。私は、鞠智城は大野城・基肄城・金田城などと同じく、朝鮮半島情勢に関わって築かれたものと考えております。鞠智城が、対隼人の備えであるという説がありますが、これは、隼人が強大な勢力をもち大きな軍事的脅威になっていた事を前提とするものです。政府が、隼人を軍事的脅威と認識するのは、7世紀末のことと思いますので(従って、海幸彦山幸彦神話を隼人に結びつけるのも、このころだと考えます)、鞠智城が隼人への備えとして築かれたとは言えないと思います。7世紀末以降、隼人に対する備えの役割を付け加えられた可能性を否定するものではありませんが、肥後国中央部まで隼人が攻め込んでくることを想定していたとは考えにくいと思います

Q／ 南島との交易について、交易品はどのような経路で大宰府に持ち込まれたと想定されますか。海路でしょうか。陸路でしょうか。陸路だった場合、南九州の貿易港(荷揚げ港)はどこと考えられますか。

A／ 回答

南島の交易品の経路については、2つの考え方ができると思います。

一つは、南島人が直接大宰府に持ち込む場合です。参考になるのが、筑後国正税帳に、多岐嶋まで帰る僧侶と運夫に対して、筑後国府が25日分の食料を支給していることです。これは、多岐嶋までの全行程の食料だと考えられますので、筑後川沿いの港から出発して、途中の港に立ち寄ることはあっても、そこで供給を受けることはなく、多岐嶋まで航行したと考えられます。これとは逆に、南島から最終的には筑後川沿いの港までやって来て、その後は陸路で大宰府に至ったということが言えそうです。

二つ目は、南島の交易品が、薩摩や大隅国を経由して持ち込まれる場合です。藤原道長と同時代に活躍し右大臣まで上った藤原実資の日記『小右記』を見ると、実資は自分の配下の者を、薩摩・大隅の国司として送り込み、そこから南島の産品を入手していました。これは、私的な交易と考えられますので、南島から薩摩・大隅まではいろいろな経路が考えられます。参考までに、万之瀬川河口に近い白糸原遺跡(南さつま市金峰町)では、時期は明確でないもののヤコウガイの貝殻が出土しています。